

鳥獣の 保護管理 被害対策

ニホンジカを適正に管理し、被害を軽減させる！

～ 生息実態のモニタリングと角こすり剥皮害の回避調査 ～

研究の背景・目的

島根半島弥山山地では、シカの生息数が増えたことによって、農林業への被害（2011年で約430万円）が問題となっています。そこで、2003年から「特定鳥獣保護管理計画」を策定して、180頭の管理目標頭数を設定して捕獲圧を強化し、また各種の被害対策を実施することによってシカとの共存を目指しています。そのため、生息数の変動や個体群の動向を把握し、被害軽減効果を検証しています。

研究方法

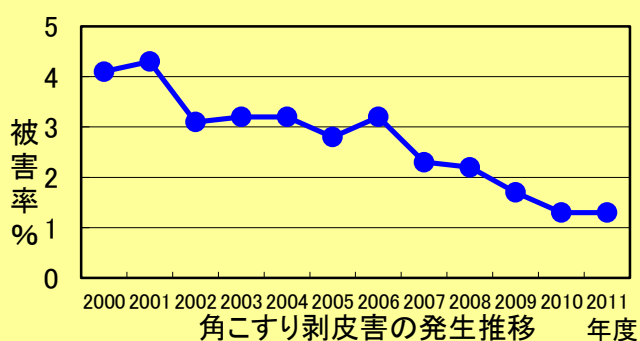
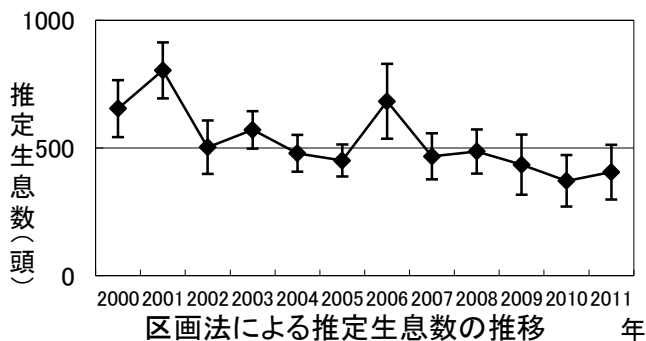
- ①区画法によって、弥山山地のシカの生息数の変動を調査しています。さらに、ライトセンサス、CPUE（1人1日当たりの捕獲数）、捕獲個体の年齢構成の変動などから、その推定数の妥当性を検証しています。また、植物現存量、被害発生量の変動から捕獲の効果検証を行っています。
- ②スギ、ヒノキへの角こすり剥皮害を回避するための枝巻き法の効果を検証し、またスギカミキリ被害の誘発の有無を調査しています。
- ③島根半島の湖北山地、枕木山山地や中国山地での生息域の拡大の実態を調査しています。

研究状況

- ①2001年の約800頭をピークに減少し、2011年には約405頭に減少しました(図)。しかし、捕獲数(約600頭)から考えると明らかに過少値であるので、ベイズ推定法を基に約950頭としました。
- ②CPUEの変動、ライトセンサスによる発見数、植生量の回復状況、妊娠率の上昇などから、生息数は確かに減少しており、シカにとって良好な生息環境になってきているといえます。
- ③生息数の減少に伴って、角こすり剥皮害の発生率は半減し、捕獲の効果が認められます(図)。
- ④枝巻き法による角こすり剥皮害の回避効果は高く、スギカミキリ被害の誘発もほとんど認められません。
- ⑤湖北山地や枕木山山地、中国山地側でも生息分布域を拡大していることが分かりました。



ライトセンサスで発見した母子グループ



研究成果の活用・今後の研究計画

- ①出雲北山山地での捕獲数は、毎年生息数調査の結果に基づいて決められています。
- ②捕獲されたシカからは、年齢、栄養状態、妊娠率、食性などを調べて、個体群の実態をモニタリングしています。
- ③得られた研究成果は、第IV期の「特定鳥獣保護管理計画」の改訂に反映される予定です。

MOUNTAINOUS REGION RESEARCH CENTER
島根県 中山間地域研究センター

〒690-3405 島根県飯石郡飯南町上来島1207

担当グループ： 鳥獣対策グループ

研究担当者： 金森 弘樹 (かなもり ひろき)

問い合わせ先： 0854-76-3818

E-mail： chusankan@pref.shimane.lg.jp

試験研究課題名：ニホンジカの保護管理と被害対策のモニタリング調査（研究期間：H24～28）

